

(57)1205「歴史は改竄される」091505 締め切り
091505 提出

「きけ わだつみのこえ」は、反戦手記ではなかった

文芸春秋に、立花隆の「私の東大論」が連載されています。2005年6月号に興味深いことが書かれています¹⁾。文脈からすると本筋ではないのですが、「きけ わだつみのこえ」の編集についてです。「きけ わだつみのこえ」は、若い人たちにはあまりなじみがないかもしれませんが、第二次世界大戦の戦没学生の手記を集めた本で、はじめ1945年に東大協同組合出版部から出版され、その後、他の書店から出版されたりして通算数百万部を誇る大ベストセラーとなった刊行物です。わたしの、そして世の中の一般的評価としては、戦没学生たちの反戦的機運を示したものであることであつたと思つていました。ところが、これらの刊行されたものが、実は戦没学生の

手記を忠実にまとめたのではなく、編者が相当意図的に1部削除などの編集を施したものであったことが明らかになり、1995年に削除された部分をすべて復元した「決定版」が岩波文庫から発表されたそうです。この「決定版」については、わたしはこれまで知りませんでした。

立花の論証によると、そもそも新版の最初の文章である「栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊ともいうべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光栄これに過ぐるものなきと痛感いたしております」が、旧版では削られて存在しなかったのです。「日本精神主義的」とか、「好戦的」と判断されて削られたらしいといっています。後世の編者の勝手なおもんばかりで、あっちを削りこっちを削りしてしまっただけでは、編者の色眼鏡を通してあの時代を読者に見させることになってしまうといっています。

編集の（暴）力

書き換えを詳しく調べた保阪正康によると²⁾、「きけ わだつみのこえ」の編集ならびに、その本を核とする戦没学生を記念する会の組織と事業が、共産党の極めて強いコントロール下に置かれ、同党主導の平和運動の一翼と位置づけられ、平和運動の高揚に寄与しないと思われる要素、すなわち戦没学生の大半は愛国者で国のため、天皇のため喜んで死んでいったという事実などをどんどん削ったからであるといっています。これはもう歴史の改竄（かいざん）といつてよいとまでいっています。

第二次大戦後のしばらくの間、日本共産党は若い人たちにおおいに人気があり、多数の議員を議会に送り込んでもしました。日教組にも強い影響力を持ち、その結果が今日のわが国における教育の混乱に引き継がれていると、わたしは考えています。時代の流れとはいえ、現在の日本共産党には昔日の面影はまったくありません。世界的にもそうですけ

ど。。。

ここで考えなければならないのは、第三者
が介入する可能性のある通信媒体のこと
です。現代では、意思の疎通は、文字として書
く・読む、あるいは、話す・聞くことを通じ
てなどのように言語によるのが一般的です。
それが、ある程度の広がりのある対象に対し
て行われる場合には、編集の操作などのよう
に本来の発信者とは別個の第三者の介入で行
われることが多いのが現代です。このとき、
意図的、あるいは無意識のうちに、言語表現
を変えたりして、元来の発信者の意思とは異
なる内容で伝えられることがときにある、と
いうよりは当然のことのように起こります。
わたしも、何回かのテレビ局・新聞社からの
インタビューを受け、その中からいくつかの
言葉だけが拾われたりして、結果的に最初の
意図とは異なる内容にされ、アッタマにきた
ことが何回かあります。

また、編集者・査読者は、必ずしも自分の

専門でない領域の対象についても編集・査読をしなければならぬことがあるのですが、本当に理解できる専門領域は極めて限られた狭いものであると自覚し、謙虚でなければならぬと自己反省もするのです。

歴史の改竄者は誰か

立花の話には続きがあります。「だんだん分かってきたことは、第二次世界大戦の時代は、後世の人々が考える以上に右翼的・国粹主義的であった。少数の右翼国粹主義者がそうであったというのではなく、世の中一般の人々のものの考え方、感じ方が、今の人には想像を絶するほど右翼的であったことで、天皇崇拝者だったということだ」といっています。私は、終戦のとき国民学校5年生でしたが、ずっと同じように考えていました。さらに立花は、「あの時代の成人の同時代者なら、みんないわなくても知っていることに類する部分である」とし、鶴見俊輔の「（今なら65歳

以上の人たちの) 日本人にとって , その記憶を心の底の奥深くに埋めてしまいたいという強い潜在的な望みを持っている³⁾」を引用しています。

それで , 「その世代の人々は , その記憶を思い出したくないために , 心の底深く埋め込んでしまったり , 記憶を心の中ですり替えて別のものにしてしまったりということを社会で広く行ってきた」結果 , 「後の世代に与えられたあの時代のイメージがどこかゆがんだものになってしまっている」といっています。「この世代の人々は , 意識的にか , 無意識的にか、歴史の改竄作業を一貫して行ってきた世代」とまでいっています。また「歴史はある意味で改竄と切り離せない運命にある。歴史は本質的に後世の語りである。語りは常に語る人の主観と切り離せない。そして主観的語りは評価価値とも切り離せない。」といっていますが , わたしも (客観的) 歴史的事実は存在・成立しえないといつも考えています。

同じ意味で、人が書いたりして介入し、価値判断が介入した場合には、科学的事実も存在・成立しないものと考えています。私の心配は、歴史的事実・科学的事実といわれてしまうと、それがそのまま鵜呑みにされてしまうことが多いことです。科学的事実といったときには、科学的という限られた範囲における関与した人の判断と考えるべきですし、現代では「科学的」という言葉が「全能の」という意味ではないこと常に意識すべきです。

自立しない日本人

立花の書いていることは、いわゆる「靖国神社問題」に関係するものと考えられます。つまり、日本人の意識の中にはあの時代の特別の人たちだけに責任を負わせることにある種の後ろめたさを感じるのです。謝罪にある種の歯切れ悪さが残るのは、全面的謝罪は自らの存在の否定につながると考えるからなのではないでしょうか。ドイツ人のように、ナ

チの人たちだけに責任を負わせることは日本人にはできないのです。そしてそれは自分たちの心の深層にしまって置き，人前ではっきり言うべきものでないとするのが日本人の心性なのです。狩猟民族と農耕民族との差とっていいでしょう。時季になったからみんな出揃って田植えをし，みんなが右足を出せば右足を出すとする遺伝子の継承が日本人をそうさせるのです。

みんながそろってする，つまり自立性を持たない日本人の心の流れに棹を差そうとした人がいます。南原繁です。結果的に、現代日本人の医療に対する（宗教的）心理構造に重層構造を生む結果になったと、わたしは考えています。

参考文献

- 1) 立花隆：私の東大論（68）。平賀東大戦争体制下の大繁栄、文芸春秋2005年6月号、p388-401、文芸春秋社、東京、2005
- 2) 保阪正康：「きけ わだつみのこえ」の戦

後史、文春文庫、文芸春秋社、東京、2002年
(最新刊)

3) 鶴見俊輔：戦時期日本の精神史、岩波現代
文庫、岩波書店、東京、2001年(最新刊)

挿絵：夏の箱根路

芦ノ湖の周辺道路付近です。月並みですが、
箱根は良いところです。首都圏から100kmち
よつとで、車で気軽に行けます。高いけどい
い温泉旅館が多数あります。美術館もあちこ
ちにあり、歩き回ることもできます。